

特集 ■ 運動器の 10 年—成果と課題

WHO が提唱した「Bone and Joint Decade 2000-2010」に呼応して、わが国でも「運動器の 10 年」が展開され、無事にその活動が終了しました。本誌では、毎年、整形外科関連の特集を年に 1 回は組むことを基本としていますが、今年はこのような背景から「運動器の 10 年の成果と課題」について取り上げることとしました。それぞれの領域における専門家に、「運動器の 10 年」に対するリハビリテーション医学・医療の立場から総論的に論じていただくとともに、脊椎外科、関節外科、手の外科の立場から、この 10 年の取り組みや進歩について述べていただきました。執筆者の方々には判りやすく解説していただき、必ずや本誌の読者の皆様にも役に立つことと思います。

リハビリテーション医学・医療の立場から (赤居正美氏, 1033 頁)

日本リハビリテーション医学会の取り組みについての簡単な紹介がなされたのち、超高齢社会における運動器疾患の意味が詳しく解説されている。特に運動低下、移動障害におけるリハビリテーション医学の立場、運動器疾患に伴う疼痛に対するアプローチが論じられている。さらにバランスや歩行障害の分類、運動低下の影響、認知機能の低下予防などに関しての言及がなされたのち、今後の方向性が示されている。

脊椎・脊椎外科の立場から (前田 健氏, 1039 頁)

ここ 10 年における脊椎・脊椎外科の進歩と問題点、今後の課題が、著者の私見を交えて解説されている。市民への啓発運動の重要性、画像診断、薬物治療法について論じられたのち、特に観血的治療の進歩が低侵襲化の流れを中心に詳しく述べられている。最後に脊椎損傷における最近の進歩と課題について、荷重免荷式トレッドミルなどリハビリテーション関連の話題、再生医療の問題も含めて言及されている。

変形性股関節症に対するリハビリテーション (馬場智規氏ら, 1045 頁)

この 10 年における変形性股関節症のリハビリテーションに関して、運動療法に着目し、保存的治療における運動療法の意義、評価、治療、今後の課題が述べられている。運動療法は、変形の進行予防、機能改善に有効であり、早期からのリハビリテーションの介入が重要で、徒手療法や神経筋促進法などについての解説がなされている。また股関節手術前後における運動療法についても、詳しく言及されている。

手外科の立場から (清水弘之氏ら, 1053 頁)

この 10 年の手の外科領域における、屈筋腱・伸筋腱に対する早期運動療法の導入、最小侵襲手技に関連した骨折治療の変化、患者立脚型の評価法の導入、関節鏡・画像の進歩などについての言及がなされている。さらに認定ハンドセラピスト制度の観点からのハンドセラピーの進歩、手外科専門医制度の確立などについても、わかりやすく解説されている。

ニュース

厚労省が復興ロードマップ、介護・子育てなど 9 項目で… 1059 福祉の再構築を柱に、今後 10 年の復興施策—被災 3 県… 1089 「ノーマライゼーション・障害者の福祉」2011 年 9 月号特集目次… 1102 介護保険の福祉用具・住宅改修、新たに 6 種目追加、来年度から適用へ… 1102 「困りごと相談せず」17%、都が施設退所者を初調査… 1106

お知らせ

第 18 回琵琶湖セミナー (自動呼吸機能検査研修会) … 1038 第 16 回リハビリテーション研修会… 1088 全国訪問リハビリテーション研究会第 19 回研究大会 in つくば… 1094 第 3 回 FIM 講習会 in 倉敷… 1102 東日本大震災チャリティー講演会… 1120